
R15の日々

ym_640

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R15の日々

【Nコード】

N6231Y

【作者名】

ym_640

【あらすじ】

高校に進学した新田雄介は、幼馴染の高松要と子供の頃と同じ様にふざけ合う毎日。でも、要の日々女の子っぽくなる容姿に戸惑う事も増えてくるこの頃。

クラスには、内気で黒髪ロングの美少女、仲町弥生や、学園の理事長の孫娘、金髪美少女の我修院彰子も居て、雄介はこれからの学園生活に胸を膨らませる毎日。

ただ、ちよっとだけ気になるのは、夜中に変な夢を見てしまう事だけなのだが…。

「雄介ったら早く起きなさいっ！」

この毎朝聞きなれた言葉で、豊田雄介は眠りから目を覚ました。起き抜けの意識の中で、いつもの見慣れた光景が見える。小学生の頃から使っている学習机と、壁際に置かれた自分の背丈程もある大きな本棚。そして、部屋の入り口に視線を向けると、毎朝顔を見るのが習慣となっている人物の姿があった。

「もう、学校に遅刻しちゃうでしょっ！」

その人物は、両手を腰に当て大きくそう叫んだ。制服の紺のブレザーと胸元に結ばれている赤いリボン、そして、膝頭から上の太ももまで露になるような、短めの赤のチエックのスカート。幼馴染の高松要だった。

「いい加減にしなさい、わたしまで遅刻しちゃうでしょっ！」

要はそう叫ぶと、雄介の身体に掛けられていた布団を勢いよく剥ぎ取った。パジャマ姿の雄介は、外気の冷たさに思わず身体を抱え込むように丸まった。要は、そんな雄介に構う事無く窓に歩み寄り、カーテンを勢いよく開けた。四月の朝の陽光は、それまで薄暗かった雄介の部屋の中を鮮やかに照らし出した。雄介は、眩しさに目を瞑り、ますます身体を丸めた。

「早く起きなさいってば……、よーし、そっちがその気ならこっちにも考えがあるぞっ！」

要はそう言うってから含み笑いを浮かべると、雄介の寝ているベッドに勢いよく飛び乗った。そして、横になっている雄介の身体を無理矢理仰向けにすると、腰に馬乗りになり、そのままベッドの脇に追いやられていた枕を雄介の顔に押し当てると、要はこう叫んだ。

「マウントパーンチッ！」

そして左右の拳を、枕の上にドスンと重々しく打ち下ろした。雄介は、たまらず、上からの攻撃から逃れるように身体を捻っ

た。

「チヨークスリーパーッ！」

雄介の行動を冷静に見届けてから、要はそう叫んで、雄介の首筋に右腕を回した。要の右腕が雄介の首筋に食い込んだ時には、既に、要の両足は、雄介の胴体に絡みつき、身動きをさせないようになっていた。背中に押し付けられる弾力を感じながら、雄介は意識が遠くなるのも感じ、慌てて、首筋に回されている要の右腕を掌で叩いた。

「やっと起きる気になったかっ！」

ゲホゲホと咳をする雄介を尻目に、要は、また仰向けになった雄介の腰の上に馬乗りになると、雄介を見下ろしながらそう叫んだ。

雄介は咳を続けながら慌てて頷き、すぐに起きると要に伝えた。そう言いながらも、短いスカートから覗く太ももと、その先にある、腰の上に跨った所で、チラチラと覗く白い色の布地が気に掛かった。「最初から素直に起きてれば、痛い目に遭わなかったのに。……んっ？ 携帯かな？ お尻の辺りに何か当たる……」

要はそう言っていると、馬乗りになっている腰を浮かせて、右手を下に這わせた。その瞬間、雄介は身体をビクンツと震わせた。

「これ雄介の携帯？ 何だか発熱してるみたいだよ。あっ、着信してるみたい。振動してるみたいだけ……」

要はそう言っつて、手を這わせている物体をギュツと強く握って引っ張り上げた。

「あれっ、引っ掛かっているのかな？ 取れない……」

要はそう言いながら、自分の右手が握っている物体に目をやった。「引っ掛かって……、えっ、これって……」

要はそう言っつたきり、沈黙したままだった。雄介は、ようやく要の身体の下から抜け出すと、ベッドから跳ね降りて要に背中を向け、先程まで、要が携帯と勘違いして掴んでいた身体の部分に手を当てた。

「キヤーツ！ 雄介のヘンタイツ！」

雄介の背後から、耳をつんざく様な、要の叫び声が聞こえた。そして、雄介の後頭部に枕がぶつかる衝撃を感じた。雄介が振り向くよりも早く、要は部屋のドアを開け、既に階段を降りていく音が聞こえて来た。雄介は、ようやく呼吸を落ち着けると、いそいそとパジャマを脱ぎだした。

1 - 1 (後書き)

学園、らぶえっち、の設定からストーリーを作ってみました。
気になった部分があったら、是非、感想をお願いします。

台所で、母親から『飲んで行きなさい』と言われた牛乳を一息で飲み干すと、雄介は礼を言い、玄関に向かった。玄関の扉を開けると、外は快晴で、朝のヒンヤリした空気に朝日の暖かさが快かった。そして、玄関の先の門柱に、要が隠れるように立っているのが見えた。要は、雄介の姿を認めると、それまで悩ましがだった表情を一変させ、怒った様な表情を浮かべてこっぴど叫んだ。

「遅いわよ雄介っ！ 急がないと遅刻しちゃうでしょっ！」

要はそう言っつて、通学バッグを肩に掛けたまま、腰に両手を当てて仁王立ちをした。雄介が、急ごうと告げると、要は雄介の横に並び、学校までのいつもの通学路を歩き始めた。

「入る部活とか決めた？」

並んで歩きながら、要がそう尋ねた。雄介は、まだ決めていない、と言った。

「わたしもまだ。部活入った方がいいと思うんだけど……」

要はそう言っつて、『うーんっ！』と両手を大きく開き、胸を突き出すようにして伸びをした。顎を仰け反らせたせいで、要のポニーテールでまとめた少し茶色の髪が、宙に垂れ下がった。突き出された胸は、高校に入学してから急激に発達しており、中学時代からは考えられないような膨らみを見せていた。その大きさは、クラスどころか、学年中を見回しても、要以上の大きさを見る事は無かった。その様子を見ながら雄介は、先程、自分の部屋で、要に組み付かれた際に感じた背中の弾力を思い出し、また、仰け反らせた顎から続く白い首筋を見詰めて、顔が熱くなるのを感じた。

「どうしたの雄介？」

雄介の視線を感じた要は、伸びを止めて、雄介にそう尋ねた。雄介は慌てて目を逸らし、なんでも無い、と言った。

「ふーん、変なの？」

要はそう言うのと、不思議そうな表情を浮かべて、雄介の顔を見詰めた。雄介は、要の視線に居た堪れないものを感じると、急ごう、と言って駆け出した。

「えっ？ ちよつと待ってよ雄介ーっ！」

雄介の背後から、要のそう叫ぶ声が聞こえて来た。

学校の校門を抜け、玄関で上履きに履き替え、自分のクラスに入ると、ホームルーム間近の教室は、殆どの生徒が登校して賑わっている最中だった。雄介は、自分の席に座り、通学バッグを置くと、聞き慣れた声がこう声を掛けて来るのが聞こえた。

「よう、雄介っ！」

声を掛けてきたのは、高校に入学してから知り合った、新田健太郎だった。中肉中背で、取り立ててハンサムでも醜男でもない、至って普通の男だった。だが、雄介に向けられる屈託の無い笑顔からは、人の良さがすぐに伝わって来た。雄介も、健太郎に挨拶を返した。

「なんだよ、また要ちゃんと一緒に通学かよっ！ 羨ましい奴だぜっ！」

健太郎はそう言って、雄介の肩を軽く小突いた。雄介は、慌てて、要とは幼い頃からの幼馴染で、その習慣で一緒に登校しているんだと説明した。

「高校に入学してからも一緒なんて聞いた事が無いぜっ！？ くそー、羨ましい……。入学した時、要ちゃんに目を付けていた奴、多いんだぜーっ！」

健太郎はそう言って、クラスメイトとお喋りをしている要に目をやった。雄介も、釣られて目を向けた。

「くそー、カワイイよなー……。あんなにカワイイのにあの胸っ！ あの太腿っ！ それにポニーテールっていうのもポイント高いよなー。雄介、お前、胸のサイズいくつか知らないのかよっ！？」

鼻息を粗くしながら、健太郎は顔を近づけてそう尋ねた。雄介は、

呆れて、近付けられた顔を押しやりながら、知らない、と言った。
「じゃあ、どさくさに紛れて、あの胸に触った事は無いのかよっ！？」

顔を押しやられるのに抵抗しながら、健太郎はそう尋ねた。雄介は、朝の出来事を思い出しながら、背中に感じた弾力を思い起こした。

「おい、あるのかよっ……！？」

勢い込みながら、健太郎はそう言い、顔を近づけて来た。雄介はある訳無いだろう、と言いながら顔を押しやっている、教室の扉が開く音が聞こえた。

「ほらっ、さつさと、早く自分の席に座れっ！」

教室の中に、やや低めのハスキー掛かった声が響いた。担任の、向坂麗子だった。周りのクラスメート達は、その声に、慌てて自分の席に付き始めた。健太郎も『後でまた聞くからなっ！』と捨て台詞を残して、自分の席に戻った。

「じゃあ、連絡事項から言うぞっ！」

麗子は、そう言うてから、連絡事項を述べ始め、背中まで掛かる髪を、右手で掻き上げた。その、教師にしては明るすぎる茶色い髪を掻き上げた瞬間、近くに寄った時にいつも漂う香水の匂いが、微かにこちらまで漂うのを感じた。胸元を開けたブラウスの上に黒っぽいスーツ姿で、スカートは、これも、教師にしては短すぎると思われるタイトスカートだった。スカートから伸びるしなやかな脚と、胸元に光る金色のネックレスの宝石が、黒っぽいスーツ姿でも、地味な印象を吹き飛ばし、華やかな印象を与えていた。そして、170センチ近くある背の高さに、長い手足とほっそりした身体つきは、只立っているだけでも、まるでファッションモデルのようだった。そして、ほっそりしていながらも、出るところは出ている女性的なシルエットで、特にその胸は、明らかに要よりも、一回り以上の大きさを誇り、少しでも身を屈めた時には、殆どの男子生徒が、その胸元に視線を注視してしまうのだった。その為、入学して一ヶ月が

経とうというのに、まだ、クラスの男子にとっては、毎朝が気が気ではないという状態だった。

「仮入部期間は今月までだから、部活入る奴はさっさと決めて、入部届け出すんだぞっ！」

クラス中を見渡すと、麗子はそう言っつて、手に持った入部届けをヒラヒラと動かした。見た目の女っぽさは裏腹な、男っぽいどころか、やや乱暴とも取れる口調で喋るのが、麗子の特徴でもあった。言う事を聞かない生徒には、男子女子、分け隔てなく厳しく当たり、その為に、男子以外にも、女子からの人気も高く、女子の間では、格好のいい女性の代表格として、話題に頻繁に名前が挙がるのも麗子の特徴だった。

残りの連絡事項を伝え、出席を取ると、麗子はこう言っつて、朝のホームルームを締めた。

「それじゃあ、今日も気合入れていけよっ！」

麗子はそう言っつと、今日の日直に、次の授業で使う教材を取りに行くように伝えた。今日の日直は、雄介の隣の席の、高松弥生ともう一人の男子生徒だった。麗子は、大きな世界地図があるから二人で運ぶように、と告げると、きびきびとした動きで教室を出て行った。

雄介が隣の弥生に目を向けると、弥生はそわそわとしながら、教室を見回していた。そして、見詰めていた雄介と目が合っつと、サツと恥ずかしそうにしながら目を伏せた。雄介は、どうかしたのか？と尋ねてみた。

「うん……。今日の日直の男子当番なんだけど、今日、休みたいいで……。先生、休みなのが付かなかつたみたいで……」

弥生はこちらを上目遣いにチラチラと窺うようにしながら、か細い声でそう言っつた。雄介は、じゃあ自分が手伝っつよ、と弥生に言っつた。

「えっ、そんな、悪いから……。多分、一人でも運べると思っつし……」

弥生はそう答えたが、雄介は、次の授業まで時間がないから、と言って椅子から立ち上がった。

「あ、ありがとう……！」

その様子を見て、弥生は、少し上気した頬でそう言い、自分も椅子から立ち上がった。

職員室に行き、麗子から準備室のカギを貰い、雄介と弥生は準備室へ向かった。準備室へ向かいながら、雄介は、弥生がチラチラとこちらに視線を向けてくるのに気付き、どうかしたのか？、と雄介は尋ねた。

「あつ、な、何でもないっ……！ ごめんね、手伝わせちゃって……」

驚いた様子を見せると、弥生はそう言って、歩く自分の足元を見詰めた。雄介は、大した事は無いと伝えた。弥生は、足元を見詰めたまま「ありがとう……」と呟いた。

隣を歩く弥生は、やや小柄な身体で、真っ黒な腰まで伸びている長い黒髪と、女子生徒の中では珍しい、膝下まで隠れそうな長いスカート姿で、やや大人し目な存在として、クラスの生徒からは映っていた。そして、その弱気な言動からか、いつの間にか、クラスの委員長まで任せられてしまっているのだった。また、要とは対照的とも言える控えめな胸は、余計、元気が取り得のような、要との性格の対比を強調していた。だが、俯きがちな姿勢から、時折覗くその顔は、色白な肌に、黒目がちな大きな目、そして、ふっくらとしたピンク色の唇を覗かせており、その日本人形のような佇まいは、何気なく視線を向けた瞬間、ハツとする美しさを感じさせる事が多かった。その為、男子の間では人気が高く、入学当初から、カワイイと噂に上る事が多かったものの、弥生のその引つ込み思案な性格は、男子を相手だと余計に強くなってしまふ為、男子生徒が勇気を出して話しかけてみて拒絶の態度を取られると、なかなかもう一度話し掛ける勇気を持つものは少ないのだった。

準備室に辿り着くと、雄介がカギを開けて、二人は準備室の中に足を踏み入れた。中は薄暗く、入り口からの光だけが、室内をぼんやり照らし出していた。二人は照明のスイッチを暫く探したが見付

からなかった為、仕方なく、そのまま薄暗い教室の中を、教材を探して歩き始めた。麗子に頼まれた教材はなかなか見付からず、次の授業の予鈴が鳴り始めた。

「予鈴が鳴っちゃった……！ 後はわたしが探すから、雄介君は教室に戻って……。授業が始まっちゃう……」

慌てた様子で、弥生はそう言った。雄介は、見つかるまで一緒に探すと言えた。

「でも、雄介君が授業に遅れちゃう……！」

不安そうに、弥生はそう言った。雄介は、仲町さんは真面目だなと言って笑い声を上げた。そして、先生に頼まれたんだから、少しぐらい遅れても解ってくれるとよ、と言った。

「ありがとう……。じゃあ、急いで探そうねっ……！」

弥生はそう言って、薄暗い準備室の中を、また探し始めた。この真面目な性格も弥生の特徴だった。委員長に選ばれたのも、この性格がもたらした部分も大きいのだろう。また、成績も、学年でトップクラスで、それどころか、県内、全国レベルでも、トップクラスの成績を叩き出したとの噂だった。実際、入学式の答辞は弥生が務め、緊張しているのは見て取れたものの、ハツキリと答辞を読み上げていた姿を思い返した。

雄介が準備室の右半分を探し、弥生が左半分を探し続けた。すると、すぐに弥生が「あつたよ……！」と言う声を上げた。雄介が振り返ると、弥生は椅子の上を上履きを脱いだ足で立ち、いろいろなものが置かれている先から、立てられて置かれている、ロール上に丸められた大きな地図を引き出している最中だった。

「暗くて……、取れない……」

地図を取り出そうと奮闘している弥生に、雄介は慌てて走り寄った。すると、壁際の荷物の影に、照明のスイッチらしきものを見つけた。雄介は、手を伸ばしてスイッチを入れた。

「キヤッ……！」

照明が明るく照らし出された瞬間、弥生がそう叫び声を挙げた。

急に点灯した照明に驚いたらしく、顔に手をかざして、光を遮ろうとしていた。そして、椅子の上でグラグラバランスを崩しだした。雄介は、また、弥生の下に慌てて走り寄った。

「キヤッ……！」

弥生は、もう一度、そう叫び声を挙げると、椅子から倒れ込んだ。雄介は、危ないっ！、と叫びながら、弥生の身体を受け止めようとした。弥生の身体が雄介に覆い被さると、二人は、雄介を下敷きにして、準備室の床に倒れ込んだ。雄介は、弥生の身体を抱きかかえたまま、イタタ……、と呟いた。

「雄介君、大丈夫……！？」

雄介の身体の上に覆い被さったまま、弥生は心配そうな声でそう尋ねた。雄介は、大丈夫だと伝えた。その時、雄介の右手の掌に、何か柔らかい感触を感じた。視線を向けると、雄介の右手は、弥生の身体を支えようとした際、その胸に手を置いていたのだ。掌の感触は、弥生の胸の感触だったのだ。雄介は、慌てて、ゴメンッ！、と叫んだ。

「う、ううんっ……！ こちらこそゴメンね……！？」

弥生は、慌てて雄介から身体を離して立ち上がると、雄介の掌が置かれていた胸を押さえて、背中を向けながらそう言った。雄介も、急いで仰向けだった身体を立ち上がらせた。

「ケ、ケガはない……？」

まだ背中を向けながら、弥生はそう尋ねた。雄介は、大丈夫だと伝えた。そして、気まずい雰囲気は誤魔化すかのように、授業が始まるから急いで戻ろう、と言った。

「そ、そうだねっ……！」

弥生はそう言うと、改めて椅子の上に乗し、地図を取り出した。「でも、雄介君も、やっぱり要さんや麗子先生みたいな胸がいいんだよね……？ 男の子はみんな大きいのが好きなんだよね……？」

おずおずと雄介に視線を向けながら、弥生はそう呟いた。雄介は、よく聞き取れなかった為に、えっ？、と声を上げた。

「な、なんでもないつ……！ ごめんなさいつ……！」
その途端、弥生は地図を抱えたまま、準備室の出口を飛び出して
いった。雄介は、一人残されたままその様子を眺めていたが、よう
やく我に返ると、麗子に頼まれたもう一つの教材である地球儀を探
し始めた。

午前中の授業を終え、昼休みを告げるチャイムが鳴った。雄介は、昼ごはんを食べようと、通学バッグを取り出し中を覗いた。

「雄介、一緒に食べようぜっ！」

健太郎がそう言いながら、弁当を手に近付いて来るのが見えた。

雄介は、ちよつと待つてくれ、と言いながらバッグの中を探し続けたが、目当ての弁当を見つけ事は出来なかった。そして、今朝の慌しさの中で、台所のテーブルに置かれていた弁当を、バッグの中にしまい忘れていた事に気付いた。雄介は、健太郎に、弁当を忘れたので、今日は学食に行くと言えて席を立った。健太郎は『相変わらず抜けてるなっ！』と言って笑い声を上げていた。

隣の席に座っている弥生は、いつもの様に一人で小さな弁当箱を広げていたが、雄介が席を立つとおずおずとこう話しかけてきた。

「雄介君、お弁当忘れたの……？ 良かったらだけど、わたし、塾に行った時に食べる夜食用のサンドイッチがあるから……。それ、食べ……。」

「雄介、もしかしてお弁当忘れてきたのっ!？」

小さな声で喋る弥生の声を掻き消して、いつの間にか隣に立っていた要がそう言った。雄介は、そうみたいだ、と言った。

「もつっ、だから、朝寝坊しないで起きろつて言ったのにつ！」

両手を腰に当てながら要はそう言った。雄介は、解つたよ、と言いながら、学食に向かおうと出口に向かった。だが、要は、雄介の右腕を掴んでこう言った。

「待ちなさいってばっ！ しょうがないから、わたしのお弁当、半分上げるからこつちに来なさいっ！」

要がそう言つて指し示した先では、要の席に、友人の春子と弘美が席を囲んでおり、机の上にはそれぞれの弁当が広げられていた。

雄介は、学食に行くからいいよ、と言つて断つた。

「ダメよっ！ どうせ、また、カレーライスでしょっ！ 栄養のバランスが悪いじゃないっ！」

要はそう言つて、雄介の腕を離さなかった。すると、要の席の方から、春子と弘美の「雄介、愛妻弁当断っちゃダメだよーっ！」という声が聞こえて来た。そして、雄介の席からは、健太郎の「そうだけ、せつかく要ちゃんが、弁当食べてもらいたい、って言ってるんだぜっ！」という声が聞こえて来た。すると、要は、春子と健太郎の両方に顔を振りながら、こう叫んだ。

「ば、ばっかじゃないのっ！ 雄介のお母さんによるしく頼むって言われているから、しょうがなく分けて上げるって言ってるんだってばっ！ それに、誰が愛妻だっ！」

顔を真っ赤にしながら、要はそう叫んだ。雄介は、その隙に、要の手から離れ、そろそろと出口に向かおうとした。その際、チラチラとこちらに視線を向ける弥生に、さつき何を言おうとしていたのかを尋ねた。

「ううん、なんでもない……」

弥生はそう答えると、すぐに俯いてしまった。雄介は、それじゃ、と嘯くと、そろそろと教室の出口を抜けた。

学食に着くと、学食の中は、昼食をとりに来た生徒で一杯だった。雄介は、カレーライスの食券を買った列に並ぶと、自分の順番が来るのを待った。その間に、学食のテーブルは、次々と埋まってしまふのが見え、雄介がカレーライスを受け取った時には、殆どのテーブルが埋まってしまっていた。途方に暮れていると、窓際にある、一際大きなテーブルが、混雑の中でポツカリと誰も座らず空いているのが見えた。雄介は、急いで、窓際のテーブルに向かった。

そのテーブルは、入学してから何度か学食に脚を運んだ事がある雄介も、初めて見たテーブルだった。他のテーブルは、簡素な木目調と見られる合板のテーブルだったが、そのテーブルは、本物の木から削り出されたと見える、黒光りするテーブルだった。普通のテ

ーブルでも、他の学校よりは上等なテーブルや椅子を使っていると
思われる学食だったのだが、このテーブルは、一種異様な感じさえ
与える高級感を辺りに振りまいていた。

座っていいものかどうか逡巡した雄介だったが、特に予約席や、
教員用とも書いておらず、使用禁止の札も無い事から、恐る恐る、
そのテーブルと同じ材質と思われる、重厚な椅子を引いて席に付い
た。

その途端、室内のざわざわしていた物音が消え、全ての生徒の視
線が、雄介に注がれているのを感じた。静寂と、周りからの視線に、
身を固くしていると、そこに、叫ばずとも、室内全体に通る声でこ
う言う声が聞こえた。

「あなた、どこに座っているの」

雄介が声の方を振り向くと、そこには、メガネをかけた女子生徒
が立っており、その視線が雄介に向けられているのが見えた。だが、
雄介は、周りの異様な様子に驚き、何も言えずに呆然としているだ
けだった。

「何とか言ったらどうなのっ!？」

メガネの女子生徒が、キツイ声でそう言った。雄介は、ようやく
我に返り、カレーライスの乗ったトレイを持って立ち上がるうとし
た。

「あら、あなた……」

すると、メガネの女子生徒の後からそう言う声が聞こえてきた。

そして、前に歩み寄って来た姿を見て、誰の声だったのかを知った。
弥生の肌の白さとも違う、白磁のような色白の肌。ややキツめな切
れ長の目と、鼻筋の通った高い鼻で、唇はふっくらとしたピンク色
をしていた。そして、何より目を引いたのは、その金色に輝く髪と、
青い目。その髪と目の持ち主は、我修院彰子、その人だった。雄介
は、すぐ退く事を告げると、慌てて立ち上がった。

「いいわよ、座ってなさい」

彰子はそう言って、手をかざして雄介の動きを止めた。雄介は、

我知らずにその命令を聞き、また椅子に座りなおした。

「たまには、下々の人間と一緒に食事をするのも乙なものだわ」

彰子はそう言つて、悪戯っぽい笑顔を浮かべると、雄介を見下ろした。雄介は、椅子に座り直すと、トレイの上のスプーンを手に取つたが、先に食べていいものか逡巡した。

「先にお食べなさいな。冷めてしまつてしょう？」

彰子はそう言つて、雄介の向かい合わせの席に腰を下ろした。雄介は、スプーンでカレーをすくい、恐る恐ると口に運んだ。その途端、それまで雄介と彰子を見詰めていた周りの生徒の空気が弛緩し、また、ザワザワと雑踏の音が蘇り始めた。

「あなた、高松弥生と同じクラスの生徒だったわね？」

雄介が食べる様子を眺めながら、彰子がそう尋ねた。雄介は、そうだよ、と答えた。

「高松弥生は、ちゃんと勉強しているのかしら？」

彰子のその問い掛けに、雄介は、クラスでは一番真面目だよ、と答えた。

「そうね、あの子には勉強以外、取り立てて目立つ部分も無いのですからね」

彰子はそう言つと、フンと鼻で笑つた。雄介は、その笑い方に感じの悪いものを感じながらも、食事を続けた。我修院彰子、彼女は、この学園の理事長の孫娘だった。幼稚園から大学までの一貫校で、その生徒数は、高等部だけでも五千人を超えるマンモス校。その高等部に雄介と同じ年に入学した同級生だった。入学した当初から、同じ学年に、もの凄い美少女が居るといふ噂で持ち切りになつたが、彰子を一目見た生徒は、その噂が誰を指してのものなのかにすぐ気付くのだつた。日本生まれの日本育ちだったものの、母親は、イタリアのトップモデルだつたといふ噂もあり、その、まさしく日本人離れたスタイルと、西洋人形のような端正な顔立ちは、学年中の男子の間の噂で持ち切りとなつた。だが、その、冷たさまで感じるような美しさと、学園の理事長である我修院の名前に恐れおののき、

こちらから声を掛ける男子生徒は誰も居なかった。その為、取り巻きを連れて歩く彰子を眺めるのが、学年の男子生徒の、隠れたイベントの一つとなっていた。

そして、中等部の頃から成績もトップクラスで、入学の際の答辞は彰子が読むものと誰もが思っていたのだが、そうはならなかった。それは、今年は、高等部から途中入学してきた弥生が、彰子を凌ぐ点数で入学したからだだった。それからというもの、何かある度に、彰子は弥生を目の敵にしており、度々、雄介達のクラスにやって来ては憎まれ口を叩くのだった。雄介は、話題を変えようと、この特別豪華なテーブルは、予約席か何かなのかを尋ねた。

「そうよ。ここは、我修院の一族だけが使ってもいい場所よ。先生方だつて使つてはいけない場所なんだから、本当は、あなたが座る機会なんて無かつた場所なのよ」

彰子はそう言つと、得意げに腕を組んだ。

「ところで、あの下品な胸をした女子生徒は、どうしてるの?」

彰子の言葉に、雄介は、下品な胸とは何の事か、どの女子生徒の事を言っているのかと尋ねた。

「下品な胸と言つたら、下品な胸よっ! あなたのクラスで、一際大きくて下品な胸をした、口うるさい女子生徒が居るでしょうっ!」

彰子の言葉に、雄介は、ようやく誰の事を言っているのかが解つた。それは、間違いなく要の事だった。

「あいつつたら、わたしに向かつて、うるさいから出て行けなんて言つて……!」

神経質そうに、組んだ腕を人差し指でトントンと叩きながら、彰子はそう言った。以前、彰子が、取り巻きの生徒と一緒に、雄介のクラスにやってきた事があつた。それは、入学してから何回かあつた事で、彰子と取り巻き達は、教室に入ってくると、席に座っている弥生を取り囲むのだった。そして、居丈高に、彰子は、一体どんな勉強法をしているのか、毎日、何時間勉強しているのかと問い

質すのだった。だが、その質問に弥生は、いつも『ごめんなさい……』と俯きながら答えるばかりだった。そんなある日、いつも同じ様に弥生を取り囲んでいた彰子達に、要が、『うるさいから出て行けっ！』と一括した事があったのだった。その時、彰子は珍しく怯んだ様子を見せていたが『私が誰だか……』と言った瞬間、要は『クラスが違うんだから入ってくるなっ！』と彰子の言葉を掻き消した。彰子は、身体をビクツと震わせ、悔しそうな表情を浮かべると、ブツブツと何かを囁きながら教室を出て行った。それ以来、彰子が、雄介のクラスにやってくる事は無かったのだった。

「本当に、言葉遣いが下品だから胸も下品になるのよっ……！」

忌々しそうな表情を浮かべて、彰子はそう言った。雄介は、腕を組んでいるせいで、普段より強調された彰子の胸に目をやった。ブレザーの間から見える、ブラウスを持ち上げている膨らみは、下品と形容する要の胸には敵わなかったが、それでも、十分、他の女子生徒よりも大きな膨らみを見せていた。

「ど、何処を見ているのっ!？」

雄介の視線に気付いた彰子が、そう言うと、慌てて胸を隠す様にして身をよじった。雄介は、どこも見ていない、と言ったが、彰子は『あのクラスには、こんな生徒しかいないのっ……!』と雄介を睨みつけていた。雄介は、彰子の冷たい視線を感じながら、慌ててカレーライスを掻き込んだ。雄介が食べ終わる頃になって、ようやく、メガネを掛けた女子生徒が、学食のカウンターから戻って来て、彰子の前にトレイを置いた。トレイの上には、他の生徒達と同じ、A定食の料理が並べられていた。雄介は、我修院なんだから、特別メニューがあるのかと思っていたと伝えた。

「せっかく下々の人間の食べる場所で食べているのだから、どんなものを食べているのか知りたいだけよ」

一緒に手渡されたナプキンを胸元に掛けながら、彰子はそう言った。雄介は食べ終わると、彰子に、お先に……、と言って立ち上がった。

「こんな席じゃなくて、みんなと同じでいいのに……」

雄介は、彰子が我知らずに呟いた言葉を聞いた。雄介は、えっ？、と彰子に聞き返した。

「な、何も言っていないわよっ！ 食べ終わったのなら早く戻りなさいっ！ これ以上、ここを使ってもいいとは言っていないわよっ！」

トレイを持ったまま立ち止まっている雄介に、彰子はそう叫んだ。雄介は、慌てて、食器の返却口へと向かった。

午後の授業が終え、帰りのホームルームが終わると、生徒達は、一斉に席を立った。部活に既に入部している者は部活に行き、帰宅部の者は家や、遊びに出かけようとしていた。雄介も、家に帰ろうと席を立った。

「雄介、悪いっ！ 今日、俺、写真部の見学に行くから、今日は一人で帰ってくれっ！」

健太郎がそう言いながら、雄介の席に歩み寄って来ると、そのままの勢いで教室の出口へと向かった。雄介は、健太郎の背中に、解った、と言った。玄関に向かい、上履きを履き替え、校門に向かう長い並木道を歩いていて、すると、雄介の背後に、付かず離れずの距離で歩く影に気付いた。振り返ると、そこには、パンパンに詰まった通学バッグを抱えた弥生の姿があった。雄介は、今から塾に行くのか？、と尋ねた。弥生は、自分に話しかけられているのか、キョロキョロと辺りを見渡し、確認してからこう答えた。

「うん、雄介君も帰る途中……？」

雄介は、そうだよ、と答えると、弥生が雄介の隣まで追いつくのを待った。弥生は、おずおずと雄介の隣に並ぶと、二人並んで歩き始めた。暫く、二人、何も声を発する事無く歩いていたが、雄介は気詰まりを感じ始め、弥生に向かって、毎日、塾に通うのは大変じゃないか？、と尋ねた。

「ううん、小さい頃からだから慣れた……」

俯きながら弥生は答えたが、雄介はそこからの会話を考えあぐね、また、二人、黙って歩き続けた。雄介は、今度は、今日の朝は悪い事をしたと伝えた。すると、弥生は、急にビツクリした様子で、雄介の顔を見詰めると、色白な頬を赤く染めてこう言った。

「う、ううん……。でも、わたしのなんか、触っても詰まらないと思っし……」

雄介は、何の事が解らずに、えっ？、と聞き返した。雄介が謝ったのは、急に準備室の照明をつけて、弥生を驚かせた事についてだったのだ。

「だ、だって……。要さんとかに比べたら、わたしのなんか全然だし……」

弥生はそう言つと、頬を赤く染めたまま目を逸らした。そこで、雄介は、準備室で胸を触ってしまった事を、弥生は言っているのだと気付いた。雄介は、慌てて、自分が謝っていたのは別の事だと伝えると、合わせて、胸を触ってしまった事についても謝罪をした。

「ご、ごめんなさい……。！ わたし、変な事ばかり言つて……。！」
弥生はそう言つとまた俯いた。俯いた弥生の頬は、先程にも増して、真っ赤に染まっていた。雄介は、弥生のその様子に、更に慌ててしまうと、詰まらなくは無い、あれぐらいの大きさが自分は好きだと伝えた。その言葉を聞いて、弥生は、ますます頬を赤く染め、下を俯いた。雄介は、自分でもおかしな事を言ってしまったと思いながら、二人、黙つたまま歩き続けた。すると、弥生が、頬を赤く染めたまま、おずおずと顔を上げこう言つた。

「ほ、本当に……。？」

頬を染めながら、潤んだ瞳で見詰める弥生に、雄介は思わず、準備室での、弥生の髪から香ってきたシャンプーの香りと、右手の掌に感じた、丁度、手で包み込んでしまつぐらいの感触を思い出した。そして、自分の顔も、熱く火照るのを感じた。

「雄介、弥生ちゃん、一緒に帰ろうっ！」

突然、そう言つ叫び声と共に、首に勢いよく腕を回されるのを感じた。慌てて、声の方に顔を向けると、そこには要の顔が間近に迫っていた。見ると、弥生も、要の反対側の腕を首に回されているのが見えた。

「春ちゃんと、ひろりんも、部活の見学に行つちやつたっ！ だから一緒に帰ろうっ！」

要のそう言う声を聞きながら、雄介はようやく、身体のバランス

を整えた。そして、よせよ、小学生じゃないんだぜ……、と言った。「何照れてるのよ、小さい頃はいつも一緒に帰った仲じゃない？」
要は、平気な顔でそう言った。そして、ようやく、首に回していた腕を解いた。

「弥生ちゃんも家に帰る途中？」

要の問い掛けに、弥生の変わりに雄介は、塾だよ、要とは違うんだよ、と言った。

「何よ、ひどーいっ！ 雄介だって、わたしと大した成績違わないくせにっ！」

要はそう言つと、頬をプーツと大きく膨らませ、プイツと横を向いた。弥生は、慌てて『そんな事ない……』と言った。

「でも、やっぱり弥生ちゃんには敵わないよっ！ 頭の出来が違うのかな？ でも、雄介に言われるのは癪だけだねっ！」

要はそう言つて、笑い声を上げた。雄介は、なんだとっ！、と言いき、要もそれに言い返した。三人は、そうお喋りをしながら歩き続けた。

家に帰り、食事をし、テレビを見ていると、すぐに夜は更けていった。雄介は、母親に『早くお風呂に入りなさい』と促されると、渋々テレビを消して風呂に入った。風呂から上がり歯を磨いていると、時刻はもう、午後十一時を回ろうとしていた。雄介は、お休みを言つと、自分の部屋に上がった。

翌日の教科書を準備し、寝る前の少しの時間に漫画を読んでいると、窓ガラスがコツコツと叩かれる音に気付いた。雄介は、ベッドから起き上がると、机の前にある窓のカーテンを開けた。そこには、ピンク色のパジャマに、これもピンク色のカーディガンを羽織った要の姿があった。雄介は、その姿を認めると、また、カーテンをすぐに閉めた。すると、先程よりも、強い衝撃で窓ガラスを叩く音が聞こえて来た。雄介は、もう一度カーテンを開けると、呆れた顔をしながら窓ガラスを開けた。

「もう、何でカーテンをまた閉めるのよっ！」

要は、そう強く言いながらも、声を潜めながらそう言った。そして、屋根を歩く際に使ったサンダルを脱ぐと、窓から、雄介の机伝いに部屋の中に降りた。いつも、ポニーテールにまとめている髪はストレートのまま、風呂上りの為か、シャンプーの香りが部屋の中に漂った。雄介は、何の用だよ、と言った。

「大した用じゃないんだけど。部活に入るのかどうか聞こうかなって……」

要は、先程までとは打って変わって、弱気な声でそう言った。雄介は、まだ決めていないと伝えた。要は『そう……』とだけ呟いた。雄介と要は幼馴染で、尚且つ、家も隣同士だった。誕生日も、要が一週間ほど早く生まれたぐらいで、そのせいか、子供の頃は、両家で、どちらかの誕生日に二人一緒に祝う事が慣例だった。その際は、どちらの誕生日に祝うかで、雄介と要はよくケンカをしたもの

だった。そして、ケンカをした際は、夜遅くになってから、この屋根伝いに互いの部屋へ行って仲直りし、子供の頃からの秘密の通路がこの屋根だった。

「そう言えばだけど、今日、弥生ちゃんと一緒に帰っていたのって、雄介から弥生ちゃんを誘ったの……?」

おずおずと、上目使いで雄介を見詰めながら、要はそう尋ねた。

雄介は、たまたま一緒になっただけで一緒に帰っていた訳ではないと伝えた。

「そ、そうなんだ……。まあ、弥生ちゃんが雄介なんかを相手にする訳がないもんねっ!」

要はそう言っていると、ベッドの上に勢い良く倒れ込み、仰向けになった。雄介は、どうしてなんだ?、と尋ねると、要は「別に、ただ、変わった組み合わせだと思っただけっ!」と答えた。

「あっ、新しい漫画見つけたっ!」

要はそう言っつて、床に落ちてある漫画雑誌に、ベッドの端から床に、腕で身体を支えながら手を伸ばした。その瞬間、雄介の目に、要のパジャマの襟元が大きく垂れ下がり、その隙間から、胸の谷間が大きく覗くのが見えた。雄介は慌てて目を逸らしながら、貸すから早く自分の部屋に戻れよ、と言った。

「返すのが面倒だから、読みたいのだけ読み終わったら戻らばっ!」

床から漫画雑誌を拾い上げると、要はそう言っつて、また、ベッドの上に仰向けに寝転がると漫画を読み始めた。雄介は、まったく……、と言いながら椅子に座り、自分も床に落ちてある漫画雑誌を拾い上げて読み始めた。

暫くして、雄介が、ベッドの上に置かれた目覚まし時計に目をやると、時計の針は午前零時を回ろうとしていた。そろそろ、要を自分の部屋に戻そうと、ベッドの上に寝転がっている要に目を向けると、そこには、読んでいた漫画雑誌を放り出し、目を閉じている要の姿があった。椅子から立ち上がって、ベッドの傍まで近寄ってみ

ると、微かな寝息が聞こえて来た。雄介は、肩を軽く揺すって、起きよ、と言った。

「う……ん……」

要は、小さくそう声を上げたが、目を覚ます事は無かった。雄介は、今度は、もっと大きく揺さぶろうと腕に力を込めた瞬間、要は大きく身をよじり、その為に、パジャマの胸元と、腰の辺りが大きくはだけた。雄介は、目のやり場に困りながらも、要から目を離す事が出来なかった。クラスの男子の中で、度々話題に上る要の胸は、仰向けに寝転がりながらも潰れる事も無く、大きな隆起を見せていた。そして、先程、胸元が覗いた瞬間に気付いた事だったが、パジャマの下にブラジャーは付けていない様子で、二つの小さな突起がパジャマを押し上げていた。また、はだけたパジャマからは、要の腰の辺りが剥き出しになり、普段の制服姿の時には気付かないくびれを見せていた。よく引き締まったお腹の上には、小さなお臍が覗き、呼吸と共に、小さく上下しているのが見えた。雄介は、少しの間、要を見詰めたまま固まっていたが、我に返ると、慌てて、要を起こそうと、もう一度肩に手を伸ばした。

「ん……」

その途端、要がそう声を上げながら、目をパツチリと開いた。その瞬間、雄介は、伸ばした腕を止め、要は、下から雄介の顔を見詰めた。二人は、お互いの顔を凝視しながら、動きを止めたままだった。

「キャツ！ ど、どこ触ろうとしてんのよっ！」

すぐに要は、そう言って、胸元をかき合わせると、雄介に背中を向けるようにして寝転がった。雄介は慌てて、起きないから起こそうとしていただけだった！、と言った。

「ふーん、どうだか……。さっきの雄介のわたしを見る目、凄くいやらしかったけど？」

背中を向けたまま、顔だけ雄介の方に向けて、要はそう言った。

雄介は、お前を見てたって、エロい気持ちになんかならないよっ！、

と言った。要はその言葉に『何よ、その言い草っ！』と言い返した。雄介は、無然とした表情を浮かべて、また椅子に座ると、漫画雑誌を広げて、遅いから早く帰るように伝えた。要は、雄介の言葉を無視したまま、背中を向けて寝転がっていたが、少しして、囁くようにこう言った。

「ねえ、雄介も女の子に興味ある……？」

雄介は、背中を向けている要に、漫画雑誌を捲りながら、そりゃあ、あるよ、と答えた。すると、要は、また、囁くようにこう言った。

「じゃあ、Hな本とか、雄介も持つてるの……？」

気まずい思いを感じながらも、雄介は、また、そりゃあ、あるよ、と答えた。

「じゃあ、女の子の胸とか、どう思う……？」

雄介は、どういう意味なのか尋ねた。

「お、大きさとか……」

顔が熱くなるのを感じながらも、雄介は、普通がいい、と言った。そして、すぐに、無いよりはある方がいいと付け加えた。要が『そうなんだ……』と呟く声が聞こえ、すぐに、こう尋ねる声が聞こえた。

「じゃあ、触つてみたいとか思う……？」

益々、顔が熱くなるのを感じながら、雄介は、そりゃあ思うよ、と答えた。

「じゃあ、わ、わたしの触ってみる……？」

要は、背中を向けていた身体を仰向けに戻してそう言った。雄介は、声を出そうとして思わず咳き込むと、慌てて、な、何言ってるんだよっ！、と言った。

「バ、バカッ！ か、勘違いしないでよねっ！ あんたがさつきみたいに、いやらしい気持ちを持って余して、他の女の子に迷惑を掛けないように言ってるのよっ！ しょうがないから、幼馴染のわたしが、あんたが犯罪を犯さないように、身代わりになってあげるって

言ってるだけよっ！ そうじゃなかったら、あんたなんかに触らせる訳無いでしょっ！」

真つ赤な顔をしながら要はそう言った。そのまま、雄介と要は、お互い、掛ける言葉が見付からずに黙ったままだった。だが、暫くすると、雄介は、黙って椅子から立ち上がった。そして、要の横たわるベッドまで近付いて行った。

「パ、パジャマの上からなんだからねっ！」

要が、ベッドの上に仰向けになりながら、身を固くしてそう言った。雄介は、ベッドの傍まで来ると、要を見下ろした。

「ほ、他の所はダメなんだからねっ……！ 触るだけなんだからねっ……！」

要は、雄介を見上げながらそう言った。雄介は、要を見下ろしながらその言葉を聞いていた。

「や、優しくなんだからね……」

要は、目を閉じると、消え入りそうな声でそう呟いた。雄介は、ゆっくりと右手を伸ばした。要が、身を固くしながら、微かに唇を震わせているのが見えた。雄介は、伸ばした指で、要のおでこに微かに触れると、その瞬間、要の身体がビクツと震えるのを感じた。

部屋の中に、ペチツ、という小さな音が響いた。

「い、痛いっ！」

その途端、要は、おでこを押さえてそう言った。先程の、ペチツ、という音は、雄介が要のおでこにデコピンした音だったのだ。おでこを擦りながら目を開けた要に、雄介は、どうせ触る瞬間に取り押さえて、弱みを握るつもりなんだろう？、と言った。

「えっ！？ そ、そうだよ……。バレちゃったかーっ！」

要は、勢い良く身体を起こしてそう言った。それから『あ、当たり前じゃないっ！ 誰が雄介なんかに触らせるかっ！ 弱みを握ってやるうって思っただけなんだからっ！』と付け加えた。雄介は、引つ掛かるかよ、いいから早く帰れ、と言り返した。

「帰るわよっ！ こんな夜遅くに雄介と二人つきりで居たら、何さ

れるか解らないしっ！」

要はそう言っつて、ベッドから跳ね降りた。手には、先程まで読んでいた漫画雑誌が握られていた。

「これ、借りていくからね」

机から窓枠に移り渡り、そこでサンダルを履きながら要はそう言っつた。雄介は、いいよ、と答えた。

「それじゃ、おやす……」

おやすみの挨拶が途中で止まり、要は大きくバランスを崩した。右手に漫画雑誌を握りながら、窓を潜り抜けようとした為に、不安定になってしまったのだ。雄介は、急いで歩み寄り、倒れようとする要の身体を、背中から抱きかかえる様にして支えた。

「ゴ、ゴメン……。助けてくれてありがとう……」

要は、ようやく安心した様子でそう言っつた。だが、雄介は、抱きかかえたまま、言葉を返せずにいた。それは、要を抱きかかえた際に回した手が、丁度、要の胸を覆う形で置かれていた為だった。手に伝わる感触は、クラスメイトの話題にいつも上り、弥生が羨み、彰子が下品な胸と形容するに有り余る、ボリウムと弾力を備えていた。雄介は、要の髪とシャンプーの香りと、その手に伝わる感触で、頭がクラクラするのを感じた。

「雄介、もう大丈夫だから……」

要のそう言う声に、雄介はようやく我に帰り、ああ、うん……、と言葉を返した。それから、窓の外に、要の身体を出すのを手伝った。

「ありがとう……、キャッ！」

雄介の腕から、要の身体が離れた瞬間、ようやく要は、雄介の手が、何処を触っていたのか気付いた様子で、その声を上げた。それは、雄介が、要の胸から手を離す瞬間、我知らず、要の胸を包み込む手に、力を入れてしまったせいかも知れなかった。

「ど、どこ触ってるのよっ！」

窓の外から、要がそう言っつた。雄介は、慌てて、ゴメンツ！、と

謝罪した。

「雄介のエツチツ！ ヘンタイツ！ スケベツ！」

要はそう捨て台詞を残すと、慣れた様子で、屋根伝いに自分の部屋の窓まで歩き、窓を潜り抜けた。それから、窓からその様子を見ている雄介に向かって、舌を出し、右目の下瞼に指を当て、ベーツ、とすると、窓とカーテンを閉めてしまった。

雄介は、カーテンが閉まるのを見届けると、自分も、窓とカーテンを閉めて、ベッドの中に潜り込んだ。ベッドの中は、先程まで寝転がっていた、要の身体の温もりと、シャンプーの香りが残っていた。雄介は、右手に残っている、先程触れた要の胸の感触と、学校で偶然触れてしまった、弥生の胸の感触を思い返した。何だか大変な一日だったな、と思いながら部屋の照明を消すと、目を閉じた。暗闇の中で、ベッドの上の目覚まし時計の針だけが、ボンヤリと光っていた。

時計の針は、午前零時を指そうとしていた。午前零時を向かえ、短針と長針、そして、秒針が一つに重なった。

“ 916Y96 ”

まどろみの中にある雄介の頭の中に、突然、そういう文字の羅列が鮮明に浮かび上がった。だが、すぐに、雄介は眠りの中に落ちて行った。時計の針は、また進んで行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6231y/>

R15の日々

2011年11月21日03時15分発行